雑　　録

タイワンドジョウの移入

天明・享保年間の江州の人栗本瑞見は有名な本草家で文政二年皇和普譜を書いているが，同氏の鱧魚に就ての記述を賀川蘭斉が写述したものを最近大阪の武田製薬会社の図書館で見る事を許された。図書主任の渡辺幸三氏がその内容についてよく解説して下さつたので，タイワンドジョウが，日本に初めて移入された事実を知る事が出来た。茲に同氏の御厚意を深謝し併せてこの図書の閲覧を許された会社伊藤純一郎監査役にも謝意を表したい。この書は全一巻の掛軸になつて上方にその説明があつて下方にタイワンドジョウが三尾精細な写生図として掲げられている。

その記事に享和3年（1803）12月に中華国の盂涵九が鱧魚（徐父貞の医滙によると一名七星魚、又呉文炳の食物本草によると黒鯉と呼ぶ）が各州県に棲息するか又どんな場所にすんでいるか，その飼育法などにつき調べた事が先づ記されてある。この魚は浙江と江蘇の境にある太湖にすみ，大きいのは体重四五斤もある。毒のある病気にも効めがあつて小供の疱瘡の時これを煎じて飲めば発疹が軽くなるし平時の様に恢復する。この魚は大きな池で飼うので，餌としては皮のない饅頭の腐つたものや河の泥などがよい。酸味や塩味その他油類をきらい，本菓物の内橄欖を最も嗜食する。

次にこの魚を日本に移入した経過についての記述がある。

文化元年（1804）6月5日に盂涵九が長崎の鎮台の肥田豊後守に10尾を進上したが当時生き残つているものは7尾である。

この記録を見てタイワンドジョウが昔から日本に移入された事が判つた。その子孫が生き残つて現在になつているかどうかは知り難いが魚の外国から移入した経路については色々調べて見ないと案外な事実が知られずにあつた事に驚く。

（岡　田　弥　一　郎）